



営農NEWS



夏季に発生するネギやラッカセイ、コンニャクなどの白絹病に注意しましょう

夏季になると発病する白絹病は、近年、ネギなど多くの作物で発生増加の傾向がみられます。

白絹病の病原菌はカビの一種で、高温を好み、更に多湿状態のときに発病やまん延が拡大し、圃場では気温 25℃付近のときに多く発生するといわれています。

このため、初夏～初秋にかけて発生しますが、特に気温が高い乾燥状態の後に、長雨で土壌湿度の高い状態が続くと菌糸の伸長が促進され、多発生する傾向があります。

白絹病菌は多くの作物に感染する多犯性の病原菌ですが、特に問題となる作物として、県内ではネギやニラなどユリ科、トマトやピーマン、ナスなどナス科、キュウリなどウリ科、ダイズやラッカセイなどマメ科、ニンジン、コンニャクなどがあり、さらに多くの花き類、樹木類など多種類の作物で発病します。

主要な伝染源である前作の罹病部やその周辺に作られた菌核（茶褐色の粟粒大）は、地表上や比較的浅い土壌中で越冬し、好適条件になると発芽して密生した白色の絹状菌糸を伸長させ、作物の地際部を中心に侵入して発病します。このため、主に地際の茎部が侵された発病株は、生育が不良となり、葉の黄化や株が萎凋して、後には枯死してしまい、感染・発病した病斑部には再び菌核を形成します。

＜防除のポイント＞

1. 圃場の排水対策を行い、土壌表面が長期間加湿の状態にならないようにしましょう。
2. 白絹病の早期発見、早期防除により、発病まん延を防ぎましょう。また、発病の恐れがある圃場では、薬剤の予防散布に努めましょう。
3. 多量の未熟有機物を施用して腐熟が十分でない圃場では、特に菌糸が増殖しやすいので注意が必要です。
4. 次作以降の対策として、発病株は菌核を作る前に圃場から持ち出し、伝染源を残さないよう適切に処分します。
5. 多発圃場は、還元型太陽熱土壌消毒や土壌くん蒸剤による土壌消毒を行いましょう。
6. 菌核は水に弱いので、長期の常時湛水処理により死滅するとされています。このため、田畑輪換は有効です。

表 1 各種作物の生育中における白絹病の主な防除薬剤（平成 28 年 7 月 19 日現在）

薬 剤 名	対 象 作 物								
	ネギ	ニラ	ピーマン	シシトウ	コンニャク	ダイズ	エダマメ	ラッカセイ	その他
リゾレックス水和剤	○	○	○	○	○	○			花き類・観葉植物など
リゾレックス粉剤	○								
モンガリット粒剤	○				○				ニンニク
ユニフォーム粒剤	○				○				
モンカット粒剤	○								
モンカットフロアブル 40	○		○※			○	○		花き類・観葉植物など
モンカットファイン粉剤 20DL	○				○				
フロンサイド粉剤	○	○						○	
アフェットフロアブル	○		○						
ロブラール水和剤	○								
バシタック粉剤					○				

注）※印の対象作物ピーマンは、ピーマン（露地）です。

なお、次作の白絹病防除対策として、各種の土壌くん蒸剤が農薬登録されています。これらは、各薬剤ごとに農薬登録の対象作物、処理方法、注意点などがそれぞれ異なりますので、登録状況を十分確認のうえ、作付け前の処理を行ってください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040